

金沢大学サテライトプラザ ミニ講演

日時 平成19年7月21日(土) 午後2時~3時30分

会場 金沢大学サテライト・プラザ 講義室

演 題 「地図でみる日本の女性」

講 師 神谷 浩夫 (金沢大学文学部 教授)

はじめに

今年の3月に今日の講演と同じタイトルの『地図でみる日本の女性』という本を明石書店から出しました。この本ができた活動の背景として、女性の地理学研究会を立ち上げて、メンバーに入れ代わりはありますが、7~8人ぐらいでずっとやってきました。全国の大学、それと高校の先生にも加わっていただいています。実はこの本の前に、2002年に『シングル女性の都市空間』、2004年に『働く女性の都市空間』という本を出しています。

ご存じかと思うのですが、東京では現在30代の女性で4人に1人くらいが未婚です。男性はもっと高くて、3人に1人ぐらいです。晩婚化等のいろいろな影響がありますし、一生を未婚で過ごす人も増えています。石川県などではそういう方は少ないと思うのですが、地域による違いが非常に大きいです。そういうことを調べているうちに、それだったら日本全体でいろいろな指標を取って地図にしてみると、「日本の中でもかなり大きく違いがある」ということが分かるのではないかと思ったのです。

日本の政策には、例えば少子化対策や高齢化対策などいろいろありますが、実際、それらは地域の状況によってかなり違うはずですが、政府は日本全体を見て政策を作るのですが、実際はなかなかうまくいかない。それは地域によって状況が全然違うからなのです。

それをもっと認識してもらうために、地図を作ろうというアイデアそのものは2002年から2003年ぐらいに生まれたわけですが、それから4~5年かけて形になりました。その途中で、NWE Cをご存じかと思いますが、埼玉県の大宮市でワークショップをやっています。そのほかの地域でも、例えば静岡県の御殿場市、横浜市、裾野市、名古屋市、七尾市、京都市、大阪市のダウンセンター、大分市など、普段から接触のあるような地域でやります。

結局は大学の研究ですから、アカデミックな論文にはならないような活動はあまり評価されないという部分もあるのですが、われわれがやってきたことを広く知ってもらうことは非常に重要なので、研究成果を啓蒙し社会に還元するための活動という位置付け

でこういうワークショップをずっとやっています。

問題 1

まず、ウォーミング・アップということで問題ですが、2005年の国勢調査で、都道府県人口に占める女性の割合が最も多い県と最も少ない都道府県はどこだと思われませんか。

答えになりますが、一番低いのは神奈川県、一番高いのは鹿児島県です。ある意味、地方で高くて、大都市で低い。低いということは、割合の半分を男性が越えています。女性の割合が低い所が埼玉県から神奈川県で、49.45%。神奈川、埼玉、千葉、愛知、こういう所が多いです。

地方の方では石川県もそうですけれども、男性が18歳になり高校を卒業したら、大都市に働きに出ていってしまいます。それから女性の方が平均寿命が長いですから、高齢化が進んでいる地域ほど女性の割合が高くなります。そういうことから、地方で高いのです。高齢化の影響で、女性人口が50%を下回っているのは4県しかありません。石川県は全国平均ぐらいでしょうか。

問題 2

二つ目の問題です。人口1000人当たりの、25～29歳の女性の出生率が最も低いのは、東京都の56.32です。大都市ほど出生率が低いのです。では最も高いのはどこでしょうか。

答えは福井県です。111.03。東京の値と比べて倍違うのです。これにはトリックがあります。それは何かというと、女性全体の出生率ではなくて、25～29歳の女性の出生率だということです。つまり、地方は結婚の年齢が早いので、子どもを産む年齢も早いのです。それに比べて、大都市の方が晩婚です。

ただ、大都市の東京や大阪で、30過ぎで女性が結婚してそれから産むというパターンもありますので、実際にはこのような倍ほどの差はないわけです。けれども全般的に、やはり大都市の方が低いです。大都市圏では、30～34歳の出生率の方が高いです。

ですから高い所は、福井、福島、山形、それから島根、宮崎。大都市は低くて、北海道、福岡も低いというパターンになっています。沖縄は日本の中でも出生率が高い所でも有名です。沖縄はわれわれの本土とはやはりちょっと文化が違います。失業率も非常に高い地域です。

問題 3

3 番目の問題です。毎年NHKで県民意識調査というのをやっていますけれども、1996年の調査で「人は、結婚するのが当たり前だと思いますか」という問いに対して「はい」と答えた人の割合が最も高い都道府県はどこだったのでしょうか。

答えは、福島県です。秋田も高いです。秋田、山形、福島の東北地方、それから富山、石川、福井の北陸地方も高いです。そして島根、佐賀、徳島。大都市は全般的に低いといえます。ただ、地方の中でも少し違いがあるということで、九州の方はそんなに高くはありません。それから太平洋ベルト地帯もそんなに高くありません。これは意識の部分ですから、なかなか説明が難しい部分もありますけれども、全般的にいうとやはりこういう傾向があるということです。

問題 4

最後の問題です。1996年の調査で「女の人にとって、一番大事だと思われることはなんでしょう」という問いに対して、「やさしさ」と答えた人の割合が最も高い所はどこか。

答えは山口県です。全般的に、全国的に違いはないのですが、地域の差が割とはっきりしています。それは何かというと、「やさしさ」が大事だと感じているのは、西日本の方が多いということです。東日本では「かしこさ」が女性にとって一番大事なことになっています。これは逆にいうと、西日本の方は、「やさしい」女性が少ないのでしょうか。あるいは東日本では、「かしこい」女性が少ないのでしょうか（笑）。

どう解釈するかの問題ですが、このように地図に落とすことによって、日本でもかなり違いがあるというのが分かると思います。

地図の解説

そこで、皆さん方はあまり地図になじみがないと思いますので、地図の解説をやりたいと思います。日本の地図を描いた場合に、よくあるパターンを類型化してみました。

今の出生率等では、大都市と地方というパターンの分布図が一番広く見られるのです。だから東京、大阪、名古屋とそれ以外の地域で、違いやコントラストがあるというパターンがかなり見られます。

それから、今の「やさしさ」「かしこさ」というのは、東西で分かります。これはもともと東日本の村の構造と西日本の村の構造が違いますので、東西で違うということです。例

えば、「食べ物などでも東西で違う」という言い方をよくするように、そういったパターンがかなりあります。

それから日本海沿岸と太平洋沿岸でかなり違うということもあります。例えば気候に関係したような事柄ですと、日本海側は冬に雪が多いですが、それに対して太平洋側は乾燥しています。だからそういう気候と関連した問題だと、こういうパターンです。

それからよくあるのが、内陸と沿海のパターンです。海沿いの地域と内陸の地域で、やはり文化や考え方も少しずつ違ってきます。

だから、日本の地図の細かい分布図を見たときに、例えば「大都市と地方」というタイプと、「東日本と西日本」という対比が、一つの地図の中に一緒に入っているということもよくありますので、そういったことに注意して読んでいただくと、分かりやすいのではないかと思います。

表現によって変わる分布図の情報

次は、表現によって変わる、地図を作るときのテクニックです。今、お見せしたのは、市区町村別の地図でした。非常に細かい地図です。それに対して、都道府県別の地図があります。都道府県別の地図の首都圏部分を、例えば市区町村別に描くとすると、同じ薄い青で統計を示してありますけれども、その中でも濃淡がかなりあります。だから東京の大都市の中でも、男女の割合の話ですと、横浜や川崎の臨界コンビナートのあたりで、男性の割合が高いということが分かってきます。また、房総の方は漁業が盛んですから、そういう所では女性の割合が高くなっています。つまり、同じ首都圏の中でも、実際にはかなり違いがあるのです。平均を取れば、首都圏の方が人口が多いので、全般的に女性の値が低くなりますけれども、このように結局、単位地区の違いによっても、かなり違いがあるということです。

女性労働力率・合計特殊出生率・3世代同居率の地図における共通パターン

そこで、大ざっぱなパターンが似ている3枚の地図があります。これらの地図に共通しているパターンはどんなものでしょうか。

一つ目は「女性労働力率」の地図で2000年のものです、それから「合計特殊出生率」の地図も2000年のもので、1998～2002年の平均値です。そして「18歳未満の子どもがいる世帯における、3世代同居率」の地図です。

女性労働力率の地図では、分母が15～64歳の女性の人口です。それに対して分子は、15～64歳の女性の労働力人口、働いている人の割合が書かれています。二つ目は合計特殊出生率の地図です。一人の女性が一生の間に生む子どもの数の平均を示したものです。3枚目が、3世代同居の割合です。分母の定義は、夫婦のいる世帯のうち子どもがあり、一番年下の子どもが18歳未満であり、3世代同居をしている世帯の総数です。

まず、日本海側が全般的に色が濃いというか、値が高いという傾向が見られると思います。後は農村それから雪国の方で色が濃い。

では逆に低い所、色が薄い所はどのような所でしょうか。少し違う地図も見てみましょう。合計特殊出生率は、1998～2002年の平均で、高い所は赤になっています。それから低い所は緑と薄緑。その中間の黒っぽい所が、その次に低い所です。それから黄色が真ん中ぐらいというパターンです。

それから市町村別の労働力率です。日本海側や、九州、中国・四国地方に若干あるというパターンになってきます。

そうすると、確かに完ぺきに同じとはいえないのですが、全般的にいえることは3世代同居が多い地域で、女性労働力率が高いです。割とよく似たパターンです。それは日本海側で割と高い値を示します。それに対して、大都市では低いです。逆に、都道府県別で、働く女性が多い所に対して、専業主婦が多い所もありますから、そう考えると、日本海側は専業主婦の割合が低いといえます。また、出生率も全般的にやはり日本海側の方が高く、大都市では低いというパターンが見られると思います。

女性労働力率・合計特殊出生率・3世代同居率の関係

これを踏まえると、女性労働力・特殊出生率・3世代同居率の間にどういう関係があるのでしょうか。

多分この三つの間に、所得が非常に重要な要因として関係してくると思います。例えば働く女性の率が高いのは、働かざるを得ないから働いているのか、それとも働きたいと思う人が多いから働くのか。二通りの解釈があるわけです。

それと働く人が多い地域と、例えば3世代同居の割合が高い地域が大体重なるのだけでも、それを説明するのは所得と、それから家の広さであると。では、例えば所得の低い所の出生率はどうなりますか。所得と出生率は、どういう関係がありますか。

日本全体の出生率が下がっているのは確かで、すべての地域でほぼ大体下がっています

が、大都市で出生率が低く、働く女性の割合が低いのに比べて、むしろ地方、特に日本海側が高いです。保育サービスの地図からは、大都市では保育園が全般的に不足していることが分かると思います。ですから、大都市は出生率が低く、働く人も少ないのです。となると、ここで3世代同居の話が絡んできます。

要するに、この三つの関係です。「3世代の同居率が高ければ、労働力率が高くても、出生率が高い」。労働力が高いことと出生率の関係は、地図の上では大体一致しているのです。ただ、それに因果関係にあるかどうかは、ちょっと分からないのです。

いわゆる統計的な相関とは違って、ここはうわべだけの相関です。3世代同居、労働力率、出生率の関係についてはいろいろな考え方があります。全般的に似ていることは似ているのですが、それが因果関係かどうかは分かりません。世の中のことですから、例えば、労働力を上げたらどうなるかという、自然科学みたいに実験をやることができないので、なかなか難しいのです。

つまりいろいろな考え方がありまして、われわれは今、石川県にいます。ここで働いている割合が、金沢の近辺は少し低いですが、能登や南加賀の方は高いですから、われわれの地域で働いている女性の割合は相対的に高いのですが、そういう所で出生率、それから3世代同居が一体どうなっているのか。そこで因果関係がどうなっているのか。子育てや働く場所、それから家の広さというのは一体、どのように関係しているのか。みんなそれぞれ関係がありそうなのです。

今回の話の非常に大きな目的は、結局、そうやっていろいろ考えてみよう。世の中の話はそれほど単純ではないということです。いろいろな要因が絡んでいます。しかもそれは地域によって違います。われわれの住む北陸地方も全国的に見れば家は広い方です。家が広いから3世代の同居が多い。それで3世代の同居が多いとどうなるのでしょうか。これが、3世代同居が多いから働くのか、それとも相対的に大都市と比べれば所得が低いから、働くのか。ほかの要因も考えられるのです。相対的に職場がたくさんあるから働くのか。例えば東北や北海道に比べれば、働く職場はそこそこありますが、大都市に比べれば乏しいかもしれません。

それから出生率の問題。少子高齢化で、出生率が非常に話題になっていますが、これを政府は高めたいと言っているのです。いろいろなアンケートで「3人ぐらい欲しい」という答えが多いという結果も出ていますけれども、「一人でもいいや」「産まなくてもいいや」という人もそこそこいるわけです。働く女性との割合が高いということと、出生率は一体

どういう関係にあるのでしょうか。確かに子育ての環境、保育所の環境もあるかもしれませんが、だから保育の図をお見せしましたように、地方の方が大都市に比べれば、保育所の環境は恵まれています。だから出生率が高いと説明できそうですが、本当にそれが正しいかどうかは分かりません。

なぜ女性が働きにでるかが分かればいいのではないかと思われるかもしれませんが、実をいえば、それも簡単ではありません。一つにはもちろん所得の問題があります。所得が低い国であれば、女性が働く割合が高くなります。それから同じ国内で見たときに、例えばお金持ちの世帯であれば、旦那がたくさん稼いでくれば、奥さんは働かなくても済むわけです。だからお金持ちの世帯に比べて、貧乏な世帯というのは、好き嫌いの問題ではなくて、働かざるを得ない。大ざっぱな答えですが、全般的にそういうことがいえます。

では、3世代同居が高いにもかかわらず、出生率が低い所があるかを見てみますと、秋田は低いです。反対に、山形県は両方高い。3世代の同居が非常に高く、出生率も高い。島根県も全般的にそういう傾向がいえます。それから岐阜の飛騨もそうです。出生率が高く、3世代同居がかなり高いです。後は、大都市圏で出生率が高い所はなかなかありません。

出生率が下がった一番大きな理由としては、子育てのコストがかかるようになったからです。つまり日本が高学歴化したからです。一番大きいのは、大学に入れるときの費用が猛烈にかかります。今、大学の進学率が非常に上がっていて、既に50%近くになっています。昔であれば、中学校か高校で就職したから、そのときの子育てのコストが安かったのです。

地図のトリック

女性労働力・特殊出生率・3世代同居率の間にどんな関係があるのかということの結論ですが、基本的に地図でいえるのは、「似ている・似ていない」ということで、「因果関係」をいうことはまず不可能です。ですから逆に、地図はだます手段としても使われます。例えば「労働力率を高めるために、3世代同居を増やせばいいのではないか」という論理も出てくるわけです。それから、「労働力率を高めれば、出生率も高まるのではないか」と思わせるのもある意味トリックの一つで、「地図のトリック」と言われます。地図からいえること以上のことを言うてしまう。それから地図というのは、市町村別、県別であって、個人単位の話ではない。つまり、全体の話なのです。全体から、個人あるいは個別の因果関

係を誤って推測するということが、よく行われます。

一番代表的なのは何かというと、現在の東京都知事が「外国人が増えると、犯罪が増える」と言ったあの話です。地図の上に描くと、外国人が多い地域は相対的に犯罪率が高いことは確かです。でもそこで犯罪のデータを調べると、犯罪率は日本人と外国人ではほぼ大体一緒なのです。むしろ外国人が低いくらいではないでしょうか。ということは、そういう地域は、ある意味では繁華街とか、もともと人の出入りが非常に激しい地域なのです。そういう地域に外国人向けのアパートの供給が割と多いので、外国人がたくさん住むようになったという因果関係があるのですが、単に2枚の地図を重ねただけで「外国人が犯罪地域に多いから、外国人は犯罪を犯す」という論理を持ってしまうということもあり得るということです。

だから地図にはいろいろな情報があるのですが、ある意味でそれを解釈するのは皆さん方なのです。解釈の仕方には、非常に注意が必要です。

女性労働力率・合計特殊出生率・3世代同居率間の相関関係と男女共同参画社会

今は少子高齢化、出生率のことが一番のトピックになっていますけれども、それを考えるときに、保育の絡みで、3世代同居を一体どのように考えるか。ただ3世代同居が、今の話で万能な解決策でもありません。所得の話や、働く女性が増えているという議論もありますし、疑似相関ですが、働いている女性が多い所が出生率が高いといったような表面的な部分もあります。それだったら働く人を増やせばいいかということそうではありません。むしろ問題があるから出生率が下がっています。

男女共同参画の話に持っていきますと、社会全体で考えると、いろいろな要因があります。例えば、大学進学率の話だと、その子育てのコストです。先ほど言いましたように、大学進学率がどんどん上がっています。それから家事時間と通勤時間の問題も、実際には働きやすさに、あるいは子育てしやすい環境に関係してくるのです。

例えば、家事時間は大都市郊外で家事の負担が多い。男性と女性で家事をどれぐらい分担しているかを表した地図で見ると、大都市圏では専業主婦が多いということが絡んでくるのですが、男性の家事時間が非常に短くて、女性の家事時間が長い。そこら辺が実際には、出生率に関係しているのです。

では、大都市の男性に男女共同参画の意識が低いかというと、必ずしもそうではありません。基本的に、大都市の場合には職場が遠いのです。通勤時間を表した地図から分かる

のは、通勤時間が長いのは大都市の特に郊外です。神奈川県、奈良県、千葉県、それで東京が4番目ぐらいになります。東京にいる人は、そこが東京だから通勤時間が短いのです。ところが郊外、奈良県に住んでいて大阪市内に通う、それから千葉県に住んでいて東京都内の職場に通う。その場合には、家事や子育てというのは非常に大変になります。保育の問題にしても、大都市ほど長時間保育が必要になってくるわけです。だからこそ、サービス残業が今、非常に問題になっています。サービス残業を短くする、それから職場と家の距離を短くする、そういう小さいことですが、出生率を上げて子育てをしやすくする環境整備のためには、非常に重要になります。

ただし、今の議論は、あまり石川県などには当てはまりません。だから政府などが駅前には保育所を作りましたと時々新聞に載っていますけれども、あれは基本的に大都市向けの話です。石川県や富山県などの地方というのは、基本的にはそういうことはあまりありません。むしろ男性にもうちょっと家事を手伝ってもらうことによって、女性が働きやすく子育てもしやすい環境整備につながってくるということになります。

もう一つが、大学進学の話です。18歳の男子の高校生がどこに行くか、それから女子の高校生が一体どこの大学に行くかということで、大ざっぱですが、女性は引越す距離が105km、男子が130kmで、男子の方が遠くの大学に行くという傾向があります。それから県内の大学に通う高校生の割合ですが、大学に進学したときに、自分の県内にある大学に通うのは、愛知県、北海道、福岡県が上位ということで、石川県は下位です。自県内大学進学率の上位都道府県では、高等教育機関が充実しています。そうすると自宅通学ですから、相対的に子どもの教育にかかる費用が安く済むわけです。それに比べて、遠くに出している所というのはかなりコストがかかってきます。こういうのも一つの要因だと思います。ではどうしたらいいかというのは、例えば政府の少子化対策にもあまり出てきていません。そういうことも考える必要があるのかもしれませんが、どうしたらいいかというのはなかなか難しく、例えば奨学金とか、そういう制度の話になってきます。だから非常に間接的な問題ですけれども、やはり関係はしてくると思います。

ほかにも就職異動の話など、いろいろな要素があります。そういう点で、女性のライフサイクルに合わせる。例えば、結婚したときの状況、実際に働いた状況、そして政治の世界だと、議員や公務員に就く女性の割合が地方で高いこと、それから出生率の話、進学の話、離婚や高齢者の介護といったようなライフイベントに即して日本のそれぞれの地域で、女性が置かれている状況がどのように違うのかということをおおまかにはまとめています。この辺

の地図も、見ると非常に興味深いとは思いますが、今日は紹介だけにとどめました。

地図作成の勧め

最後に、最近の状況を少し説明したいと思います。今回のこの地図は、われわれ地理学者と呼ばれる大学の先生が主になって作ったのですが、最近では地図のデータ、それから実際の国勢調査のデータも、自治体のホームページからどんどんダウンロードできるようになっています。ですから皆さんも、1～2回ぐらい授業を受けると、割と簡単に地図が作れるようになるのです。GISという技術がありまして、そのソフトウェアは今、ほぼ無料で、お金はほとんどかかりません。境界線のデータと、それからインターネットに接続する環境があれば、こうした地図はどんどんできます。そのうちそういう地図を作るような講習会などもやりたいと思っています。それによって、もっと面白い地図がいろいろ描けるので、これからそういうものも活用していただければと思います。

質疑応答

(質問者1) 2～3年前に、「世界不思議発見」という番組の中で、コロンブスがアメリカ大陸を発見した1492年よりも71年前に、実際は既に中国から2万人の船団を組んで世界中に散らばったと。ですから南極大陸の切れ切れの地図などはすべて中国人がもう既に作っていて、コロンブスは中国人の作った地図を元にして、アメリカ大陸を発見したという番組がありましたけれど、それはご存じでしたか。

(神谷) いいえ、あまりに古いところはちょっと。

先ほど申し忘れましたけれども、入り口に本の案内がありました。実際に現物も持ってきましたので、もしご希望の方がありましたら、販売します。それから、もしお時間がよろしければ、つたないお話ですけれども、講演の感想を紙にご記入いただければありがたいと思います。よろしくお願ひします。

(質問者2) 今日この『地図でみる日本の女性』を、大学の先生としてどのように分析して公開されたのか。それで男女共同参画の展望というか課題について、もしかしてご意見をお聞きできるのかなという思いもあったので、少しお聞かせいただけないでしょうか。

(神谷) 私が詳しく調査したのは、実は東京で働いている女性がメインで、あまり石川県については調査をしていません。大体東京ですと4分の1ぐらいが30代の女性で、4分の1ぐらいが独身の方で、実際に分かったのはこういう人たちが出生率を下げているということです。ではそういう人が仕事に燃えてバリバリ働いているかということ、必ずしもそうではありません。やはり家賃が非常に高い。だから働かざるを得ないというそういう状況があるのです。だから出生率というのは、住宅費とかそういったトータルで暮らしやすい環境を作らないことには、なかなか簡単に上げることはできないのです。

そして参考程度に、やはり東京がメインですが、男性も少しだけ調べました。女性もそうなのですが、例えば独身の男性が、今言ったように「絶対に結婚しない。ずっと独身で、これからも暮らすのだ。仕事一筋でやっていくのだ」とは、全然思っていないのです。また、女性は都心の近くにマンションを買って独り暮らしをしますが、男性は郊外に一戸建てを買うのです。「一戸建てを買って、お嫁さんが来てくれるかな」と、勘違いするらしいのです(笑)。

でも今の話で、郊外に家を買って住むと、女性は非常に働くのが大変になるわけです。だからやはりそういうことこそが、男女共同参画ではないですけども、一緒に働いてかつ子育ても均等にして、近くに保育所があるというような環境の整備の方向に、なかなか行っていないのです。まずは意識改革みたいなものが必要なのかなと東京の30代の独身男女を見ていて、強く思いました。

(質問者3) 日本には昔、マッカーサーの指令で夏時間がありました。アメリカの緯度が日本と同じなのです。にもかかわらず日本では現在も夏時間の導入については全く声がない。なぜか。日本では「向こうのように、5時までにきちんと仕事をやめなさい」ということに、国民が一致しない。これは文化の違い・民族の違いに加えて、忙しいということが関係あるのではないかと思います。

夏時間の場合、例えばヨーロッパで時間を確認すると、必ず本来の時間の1時間前になっているわけです。そのことについて、日本国民はほとんど知らない。向こうのように夏時間を設けるということは、不可能なことでしょうか。

(神谷) 簡単に言いますと、北欧などで、夏になぜあれだけ長い間休みを取るかというと、太陽を浴びるのです。そうでないと紫外線不足で、クル病になってしまうのです。そ

れに比べて、われわれは紫外線をたくさん受けていますので、私の体もそうですが、夏になるとすぐ黒くなってしまいます。だから無理やりサマータイムで休みを取って、紫外線を浴びる必要は全然ありません。むしろ、紫外線からできるだけ避けようとしていますので、あまり必要性はないのです。

(質問者3) アメリカの緯度は日本と変わらないのです。変わらないにもかかわらず、アメリカでは非常に好評で、夏時間帯だからといって不況ではありません。それが日本では考えられない。以前日本でやったときには、不調でした。「人の楽しみは人が作る」ということで、人権の問題もあるかもしれません。